

# CURES

## NEWSLETTER

地域経済  
ニュースレター

1988.7.15 No. 8

### 巻頭言

## 金沢の国際化を構想する

佐々木 雅 幸

日本経済の本格的国際化時代を迎えて、都市の国際化が求められている。

首都東京はニューヨーク、ロンドンと並ぶあるいはそれらをも凌ぐ「世界都市Tokyo」へと華麗な変身を遂げている。東京オフショア市場の開設に伴って、丸の内地区には世界中からビッグビジネスがジャパンマネーをめがけて殺到し、そこはマンハッタン、シティに匹敵する国際金融・ビジネスセンターと化した。

さらに加えて、世界都市Tokyoの国際的情報発信能力は飛躍的に高まり、今やファッションの世界でもTokyoはパリやミラノと肩を並べ、それらの地位を脅やかしてさえいる。

このように「国際化」は発展する都市のキ

ーワードとなったとって過言ではない。

そこで、札幌、仙台、名古屋、大阪、神戸、広島、福岡など中核都市もTokyoの後を追いつつながら必死に「国際化」をめざしている。国際空港、国際交流会館、テレポート、国際会議場、国際見本市会場などハードな国際化支援インフラストラクチャの建設と、各種の国際シンポジウム、国際博覧会、国際フェスティバルといったソフトな国際化施策とが目白押しといった状況である。

だが、全国の中核都市が拙速に世界都市Tokyoの後追いをし国際化をはかるならば、リトル東京、ミニ東京が巷にあふれ、結果的に都市の個性は消失し、東京一極集中構造を促進することになりはしないであろうか。

- 巻頭言 ..... 佐々木 雅 幸
- CURES Report  
「昨今ブダベスト事情——カーダール退陣の背景にふれつつ」 ..... 堀 林 巧
- CURES Salon  
「私の研究関心」 ..... 山 辺 知 紀
- Information Processing  
「情報伝達に仮面は無用」 ..... 後 藤 則 行
- 地域経済文献情報

金沢大学経済学部

そこで、伝統的文化と美しい景観をそなえた個性的な都市である金沢の国際化をはかる上で、Tokyo型世界都市化の対極に立つ金沢型国際都市を構想することが是非とも必要である。

最初に「国際化の現状と問題点」を把握して、あるべき金沢型国際化の視点を見出してみよう。

(1) 国際化とは一般に「人・物・金のレベルでの国際交流」と言われるが、現在の日本（経済）の国際化は明らかに「物」と「金」のレベルで無秩序に進行しており、そのことによって対米貿易不均衡に代表される各種の摩擦現象をひきおこし、日本経済は世界経済の攪乱者の役割を演じている。このような問題の解決なくして21世紀の円滑な国際経済秩序はありえない。そこで、「物」と「金」のレベルでの秩序ある国際交流が求められるだけでなく、「人」のレベルの国際化、すなわち、国際的な文化交流や国際的視野をもった人材の養成が必要となっている。本来、国際化とは相異なる文化や精神を備えた諸民族が相互理解を深め、国家や民族をこえた友好の絆を拡大してゆくことである。

それゆえ、「物と金」の国際交流に先行して「文化や精神」のレベルでの国際交流を進めることが重要である。

(2) 国際化とは一般に「国家」間あるいは「国家行政官（機関）」相互の交流が中心であるとされてきたが、これは歴史的にみると「国家利益」や「権益」が前面に押し出され、種々の軋轢を生じてきたといっていよい。場合によっては戦争という不幸な結果を伴ったことも事実である。そこで近年「草の根外交」「民際交流」という考え方がうち出されてきた。国家が前面に出るのではなく、草の根の庶民のレベルでの交流を重視しようというのである。国家利益にとらわれることのない、庶民の日常的感覚での国際交流こそ国際化の本来のあり方だと思われるのである。

(3) 現在の国際化は世界都市Tokyoを軸に、地方社会の国際化もTokyo経由で進行しているといつて過言でない。このため「国際化」が東京一極集中構造を促進する原因を作りだし国土の不均衡を促進している。

およそ、巨大都市への一点集中構造は途上国型の国土構造といつてもよく、先進国にふさわしい多極分散型国土への転換が強く求められている（「第四次全国総合開発計画」）そのためには、いつまでもTokyo経由の国際化に頼っているのではなく、「地域からの国際化」が重要になっている。

(4) 世界都市Tokyoも危機に立っている。都心部の国際金融センター化によって地価高騰がひきおこされ、高層のインテリジェントビルが雨後の竹の子のように林立する「影」で江戸っ子たちが住みなれた下町の長屋もろとも排除されてしまったのである。いわばTokyoは原風景を喪失することによって世界都市となったのである。つまりTokyoは江戸の面影を失うことによって「無機質な」「無国籍な」世界都市となった。一体、真の「国際都市」とはその景観や街並みに独自の文化や個性をたっぷりと保存している「まち」ではなかったのか。フィレンツェやミュンヘンなどヨーロッパの歴史的都市はこのことの重要さをわれわれに教えてくれている。「金沢らしき」にこだわった「国際都市」のあり方が求められている。

以上の検討から次の5点が金沢型国際化の視点として浮かび上るのではないだろうか。

(1) 世界中の人々との「文化や精神のふれあい」を大切にした国際交流を先行させる。

(2) 金沢市民が主体となった草の根の庶民レベルの国際交流を重視する。

(3) 金沢の原風景を充分に保存し、歴史的個性にみがきをかけ、「国際都市」としての魅力の世界に発信する。

(4) 「地域からの国際化」をすすめるため

に、日本海地域における国際交流の拠点都市として基盤整備をすすめる。

(6) 金沢型国際化戦略の成否を握るのは世界的視野をもった金沢人の育成である。

では金沢型国際化のシーズはどこにあるのか、その現状はいかなるものかについて見てみよう。

まず第一に藩政期以来の伝統的文化・工芸と歴史的建造物・街並み・景観など都市のストックに恵まれていることである。

加賀百万石の伝統を継承し、戦災にも遭わず、また高度成長期における工業化の波を直接被らなかつたことから、金沢は地方都市の中でも比較的古い街並みや歴史的な建造物を多数残しており、近年は東京よりも江戸の面影をよく伝える都市としての評価がされてきた。また、地域経済も地元の中小企業者によって支えられてきたために、茶道や謡曲など伝統文化や伝統的生活様式が人々の日常生活のなかに生きている。そのため、かつて加賀藩細工所に集められた職人の「業」は金箔、金沢漆器、加賀蒔絵、金沢仏壇、九谷焼、大樋焼、加賀友禅などとして時代をこえて光り輝いている。

しかしながら、近年になって、これまで内発的な地域経済の発展を支えてきた繊維産業の急速な衰退が始まり、それに歩調を合わせたかのように外来の不動産資本によるマンション建設が急ピッチで進行し始め、伝統的な街並みが崩壊し、地場産業が苦境に陥ろうとしている。金沢型国際化のためのシーズが急速に消失しようとしているのも事実である。

国際化のためのシーズの第二は、「天下の書府」金沢の育んだ文学的・学術的ストックである。金沢市民が愛する知的学術的雰囲気と都市景観の文化性そして北陸の独特の風土がミックスして金沢固有の文化的・文学的土壌を形成し、徳田秋声、泉鏡花、室生犀星といった三文豪に加えて、井上靖、中野重次、

五木寛之などの文学的才能を開花させてきたことはよく知られている。近年、このような金沢の文学的環境に関心をもつ外国人もふえている。カナダ人留学生M・C・ポルトン氏が泉鏡花の『龍潭譚』を英訳出版し、鏡花作品の国際化を試みるという興味深い事例も生まれている。

このように金沢の文学的ストックは国際化の契機を迎えているといつてよい。

第三は、全国的にみても高い水準にある草の根のボランティアグループによる国際交流活動である。この中で全国的に注目されるグループとしては「金沢を世界にひらく市民の会」があげられる。このグループは、約10年前に当時26歳のアメリカ人女性ルース・スティーブンスが、金沢の街の持つ魅力に強くひかれ、これを国際的に紹介したいと現在の事務局長である松田園子に英文ガイドブックの作成をもちかけたことに始まる。二人は『KANAZAWA』というガイドブックを完成させ、この本の成功に自信をもち、その収益を基礎に「市民の会」の活動が始まった。現在はロンドン大学日本語セミナーを引き受けるなど多彩な活動を行っている。このグループは昭和56年度サントリー地域文化賞や62年度国際交流基金地域交流振興賞を受賞するなど草の根の国際交流のあり方をさし示すものとして全国的に評価が高い。

このほか、いくつかの市民グループがそれぞれ独自の国際活動を行っている。草の根の市民レベルの国際交流の重要性が認識されている今日、これらグループのエネルギーは金沢型国際化への重要な財産である。

以上のような国際化のためのシーズを開花させた時、金沢が環日本海地域における国際交流拠点として大きく飛躍することが可能である。だが、そのための土壌として日本海沿岸諸地域・諸都市との「友好と信頼」の関係を築く必要がある。環日本海地域の平和と友好こそ、金沢型国際化の試金石といえよう。